慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	近松世話物の考察 (序)
Sub Title	Chikamatsu's domestic plays : An introduction.
Author	鈴木, 昇(Suzuki, Noboru)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1955
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.5, (1955. 11) ,p.21- 34
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00050001-0021

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

近松世話物の考察 (序)

鈴 木

昇

ようと思う 近松の世話物の本質的なものは何か。その問題を考察するに當つて、ここでは先ずその前提として、全體に共通した性質を考えてみ

られている爲に題材は古いがその要素が薄い。故に此の二つはとりあげることにする。然し、他の世話物とは一應區別して考える必要 がある。此の様にして殘された作品は十七篇である。この中に心中物十篇、處刑物四篇、姦通物三篇が含まれている。以下此の十七篇 が、時代物的要素を含むのでこれも除外する。ただ「五十年忌歌念佛」と「大經師昔曆」とはほぼ西鶴の「好色五人女」に沿つてつく 町女腹切」もそれに類する。これらの作品は、焦點をずらさない爲に一應除外する。又「卯月の潤色」は「卯月の紅葉」の續篇である たもの、それに準じるものとして、「淀鯉出世瀧德」や「夕霧阿波鳴渡」も加えられる。又、事件は比較的新しいが内容が假想的な「長 世話物の中にも時代物的要素の强いものがある。「薩摩歌」「丹波與作待夜の小室節」「山崎與次兵衞壽の門松」等俗謠に素材を求めている。「「「」」「「」」「「」」「「」」「「」」「」「」「」「」「」「」「」「」

(註1)時代物的要素の說明はここでは省略する

を對象として考察をすすめて行くことにする。

をもとに分類してみると、心中物は大別して三つに分けられる。 第一に、共通の要素として結末が主人公の死(若しくはそれを暗示する)に終るということが擧げられる。そこで此の死に至る理由

→ 男の側に死ぬべき理由があつて、女がこれに従うもの。

口女の側に死ぬべき理由があつて、男がこれに従うもの。

(三男女相方に死ぬべき理由のあるもの。

になつた各、はその構成が非常によく似ている。これを的間接の理由、 更に、未婚男女、遊女嫖客、夫婦の場合があるから、これらを組合わせた結果は六通りになる。夫婦の場合は円口を一組とみて、組 回直接の理由、
の動機、
ら敵役の存在、
は傍系的人物の五點か

ら比較すると左の如くなる。一つは他の改作若しくは展開であると云つてよい。(○の中の數字は上演順序を示し、以下この數字をも

つて作品番號とする。)

遊女嫖客の場合

A、男に理由のあるもの (①曾根崎心中、 ⑫生玉心中

(1) 縁談あり①②

(II) 負債を負う①⑫ 詐欺に會う①⑫

無實の罪(證據なし)①

(1) はずかしめ、誹謗①

金を奪われる⑫

二、あり①⑫

(叔父) ①

(12)

В 男女共に理由のあるもの (②心中二枚繪草紙、 (9心中刄は氷の朔日)

(4)、なし②9

四、男――無實の罪 (證據なし) ② 商人道に反する行爲をする⑨

(女を得る金の才覺とゝのわず) ②③

主人⑨

th、養父②

なし
⑨

三、あり②

(1)、勘當②③

女——身受②③

養父のことば②

C、 | 男に理由のあるもの (③卯月の紅菜)

(女に理由のあるもの(⑰心中宵庚申)

夫婦の場合

舅との約束①

(イ)、なし③

口、離緣③①

い、養父の怒り③

無實の罪 (證據なし) ③

機母のことば⑦

三、あり
③
切 義父③

遊女嫖客妻の場合 (4) 繼母(7)

D、女に理由のあるもの(⑤心中重井筒、⑤心中天網島)

(1)、妻子あり(5)15

四、(女の爲の金の才覺とゝのわず)⑤ (女を得る金の才覺とゝのわず) ⑤

親の災難⑤

い、兄の態度⑤

身受(5)

舅のことば⑮

三、なし⑤⑤

H、兄夫婦(5)

兄・舅⑮

未婚男女の場合 E、男女共に理由のあるもの(⑥心中萬年草、®今宮心中)

(イ)、なし⑥⑧

-- 24 --

(口) 男 -寺の掟を破る⑥

計らずして主家に迷惑をかける⑧

い、女の母に表へ出されて立場を失う®

女

縁談あり68

家質の手形を破る⑧

白、なし⑥

あり8

け、女の兩親⑥

主人⑧

姦通物、處刑物の場合も、州罪狀、

[|]印犯罪の間接的理由、

八犯罪の直接的理由、

から比較すると左の如くになる。

F、姦通物 (④堀川波鼓、⑪大經師昔曆、⑬鑓の權三重帷子)

四、夫が江戸詰④3 化、姦通(4)(1)(1)

い、相手の男の誤解が解けず、

口止めの爲(深酒)

④

親の災難、盗印事件①

夫をいさめる爲(暗闇の間違)⑪

(<u>~</u>) 他人の誤解(4)(1)(3)

茶道傳授的

(4)犯罪の動機、財敵役の存在、(4)傍系的人物の五點

25

<!\`, 弟④ は、あり4003 母 (II)

代、無實の罪で 殺人⑦(16)

G、處刑物(⑦五十年忌歌念佛、

預り金使用⑩

海賊鱼

四、縁談あり⑦

なし⑩46

い、他人の作爲、主家の爲⑦

身受⑩⑷

借金低

(金の才覺とこのわず) ⑩(4)(6)

金を奪われる砂

(三、出來心⑦ 脅迫(1) 誹謗に對する虚榮⑩

⑩冥途の飛脚、⑭博多小女郎波枕、⑯女殺油地獄)

— *26* —

勘當(6)

お吉の態度値

は、あり7個年

なし16

八、主人・父⑦

養母・實父⑩

3

母・兄・繼父低

姦通物も「鑓の權三重帷子」は「堀川波鼓」の展開であると云うことが 出來る。「大經師昔曆」が多少異つて居るのは、

西鶴の「好色五人女」に大體よつているからである。 處刑物は同じく西鶴の先行作品を持つ「五十年忌歌念佛」を除けば、他はすべて遊女との關係がもとになつて行きがかり上罪を犯す

展開している。「冥途の飛脚」はBから出て、Dの要素を受け、Aの要素も取り入れている。「博多小女郎波枕」はAから出てBの要素 を强く受け、更に「冥途の飛脚」の要素をとり入れている。「女殺油地獄」はBから出てD・Fの影響が加わつている等々。 れる。乃ち、「五十年忌歌念佛」は大體Eから展開しているが、他の三篇はABCの各要素に、姦通物や處刑物相互間の要素を加 えて という點で一致している。しかし處刑物の場合は、その相互關係に於けるよりも、寧ろ心中物との關係に於いて綜合的な展開が見出さ

いことと、敵役の存在とで共通し、③④⑤に於いては装という立場、乃ち家庭があらわれ、⑥⑦の未婚男女への道をひらいている。 れている。更に原型そのものが、上演された順序に従つて、前の作から後の作へと展開をみせている。①②⑤は無實の罪と、證據のな 以上七つの範疇の原型(①②③⑤⑥④⑦)を年代順に並べてみると、先ず最初にこの七つの型が出來て、その後にそれぞれが展開さ

又、姦通物、處刑物の原型になる「五十年忌歌念佛」と「堀川波鼓」とは共に近松以前に先行作品が存在している。心中物の嚆矢、

筋の展開を

先立つ他の作家、或は自分の作品があつて、それをもとに、更に新たな要素を加えることによつて道を開いているという事が、その構 「曾根崎心中」さえもその以前の芝居上演を云々されている。此の様に、近松の場合、常に新しい範疇や作品が生れる爲には、

次に共通の要素として、男女關係が擧げられる。此の點から分類してみると、先ず全體が、

成の上に見られると思う。

- Ĵ 相愛の男女が外部的事情によつて結婚することが出來ない場合
- の二つに分けられる。 $\widehat{\mathbb{I}}$ 夫婦が外部的事情によつて結婚をとかれる場合
- (1)の理由の第一は、男女の一方が他に配偶者乃至婚約者を持つ場合である。これを細分すると、 男が縁談を持つ場合①⑦②
- (口) 女が縁談を持つ場合⑥⑦8
- 遊女が身受される場合②⑨⑩⑭⑮

男に妻のある場合のほ

て、女は最後迄夫を愛し續けて居り、戀愛の悲劇としてみるよりは、夫婦がそいとげる事の出來ない家庭の悲劇として見る 方が 當

姦通劇、乃ち「女に夫のある場合」は、近松に於いては、相愛の男女の姦通というより寧ろ一寸した拍子で姦通したもの許りであつ

- ている。故にこれは(Ⅱ)に含めるべきである。唯、 よつて姦通が成立し、夫を愛しつつ死んで行くという範疇を越えていない。 反對に、 □の場合、(■)の要素を同時に含んでい る が 一鑓の權三重帷子一のみは、戀愛的要素が含まれているが、矢張、外部的理由に
- 四つの類型にはずれるものは「女殺油地獄」だけである。この作品は、本來ならば與兵衞と共に中心に來る筈の小菊の存在が蔭の方へ (1)の方が强く表面に押し出されている。(此の事は近松の浄瑠璃の性質を示すと共に、當時の世相を願わしているとも云える。) 以上

違う。ただそこに關聯性は見る事が出來る。(2) まで可能性であつて實現はしない。與兵衞の場合は戀ではないし、お吉の與兵衞に對する感情も、おさゐの權三に對するそれとは全く 帷子」のおさゐの言葉を思わせる。乃ち此の作品は、恸「女に夫のある場合」の可能性を考えさせるものである。しかし、それはあく 吉が中心に出て來ている。此の作で、與兵衞がお吉に對して「不義になつて貸して下され」というところがある。これは「鑓の權三重 押しやられている。小菊の他に松風という女もある。そして二人とも與兵衞にすがりきつていない。それに對して傍系的であるべきお

此の他「五十年忌歌念佛」は´の回を共有して居り、「心中天網島」は´の口を共有している。

さないことと、男に金のないこととがその理由となつている。 立場の者が多い。一方女も、遊女、下女、親がかりの娘等、自由の利かない者である。そして、遊女の場合は、 (1)の第二の理由としては身分が擧げられる。男の身分は小姓、手代、弟子、養子、入婿、小商人の子弟等、 娘の場合には、 男の家柄や財産が理由になる 相手の男の保護者が許 すべて自由の利かない

(Ⅱ)の方の理由としては、第三者の介入が擧げられる。細分すると

(1)、鼻や姑の要求③① た場合⑪

ハ、姦通④①3

(Ⅰ)の臼はਿが表面的に展開したものである。臼は完全に妻の愛が他へ向つた場合と云いきれない。尙「大經師背曆」は(Ⅱ)の臼と臼

を中心にして見た場合、 として間男したととがめられる處がある。それは姦通劇を聯想させる。此の様な關聯性は「女殺油地獄」のお吉に迄續いている。 は、(Ⅱ)の要素が傍系化して、他の夫婦物に於ける傍系的人物が主人公になつているということになる譯である。此の樣に、心中物、 そこで(Ⅰ)の臼並びに(Ⅱ)の作品を年代順に並べてみると、興味ある事實を發見する。乃ち、「心中重井筒」のお辰が夫をかば 此の作品は、(■)の『夫婦が外部的理由によつて結婚をとかれる場合』に屬していると云える。 におう

犯罪物を通じて、作品間に極めて類型的な内容のつながりを見ることが出來る。

(は2) この問題は作品論に於いてとりあつかうことにする

第三の要素として、犯罪が擧げられる。この點から分類すると

○無實の罪によるもの

A 他人の作爲によるもの①②③⑦

口自己の罪によるもの

A 他人の作為によるもの4¹

B 自己の過失によるもの④⑦®⑪

C 自己の作爲によるもの⑥⑨⑩⑬⑭⑯

白他人の罪によるもの

A 災難によるもの⑤

P 作爲によるもの①

にある。例外は「心中重井筒」だけである。又、「堀川波鼓」は⇔のAとBを、「五十年忌歌念佛」は⇔のAと≒のBを、「大經師昔暦」 右の例にはずれるものは「心中天網島」と、「心中宵庚申」の二つだけである。又、 犯罪は、 姦通物は女にあるが、 他はすべて男の側

は口のBと曰のBを共有している。(これらの三篇は共に、近松以前に先行作品のあるものである。)

もかくとして、「曾根崎心中」の忠兵衞は、他人の預り金を友人に貸して居るし、「心中二枚繪草紙」の市郎右衞門は、御酒德利の中の 金を着服し、「卯月の紅葉」の與兵衞は藏を破つて い る。 此の樣に見てくると、例外の「心中重井筒」の德兵衞さえ妻の判を盗んでい

ところが、無實の罪によるものの中にも、表面的ではないが主人公自身の犯罪、又は類似の反社會的行爲が含まれている。理由はと

單なるつながりを示す以上に、全體に亙る内容的な展開のあることを示している。次にその展開が如何になされているか考察してみる 罪に對する責任が次第に强化されている。しかも作品の上演順序がほゞ項目の順序に從つて並んでいる。この事は心中物と犯罪物との 犯罪性を帶びてくる。(此の좟の作品が處刑物の「冥途の飛脚」である。) 又、此の分類の項目は⑴のAから⑴のCにかけて、主人公の る。それが更に「心中萬年草」の条之助に至ると寺の掟を破り、「心中刄は氷の朔日」の平兵衞は宿村の註文を受 け て、はつきりした

ことにする。

くなる。「曾根崎心中」の德兵衞は申譯の爲に、「心中重井筒」の德兵衞は面目をたてる爲に、お房は恥を見ない 爲 に、「卯月の紅葉」(3) る。刑を受けるのはすべて後期に屬している。一方、心中物の中にあつても、後期のものは、前期のそれに較べて生に對する執着が强 のことは心中物及び犯罪物の内部に於いても言うことが出來る。前期の處刑物や姦通物は、二つとも主人公が死刑の直前に自殺してい 期に於いては自ら死に向つて行く作品が書かれ、後期に於いては出來るだけ死から遁れようとする作品が書かれている。ところが、其 後半期を主體としていると言うことが出來る。心中は進んで死におもむくものであるが、處刑は求めずして死が與えられる。乃ち、前 型が前期の極めて初期に出揃つて了うことは前に述べたが、前期は殆ど心中物が占めている。後期は敷も少い。それに對して、姦通物 の與兵衞は言譯を見苦しい事として、それぞれ進んで死に向つているが、「生玉心中」の嘉平次は、親をあざむき、其の親切を利 用 し や處刑物は、原型の二つをのぞいて、すべて後期に屬している。乃ち、近松の心中物は數の上では前半期を主體として居り、犯罪物は ると、(此の境界は嚴重なものではない。⑧「今宮心中」から⑪「大經師昔曆」に至る作品は中間的な性質を持つてゐる。) 各範疇の原 世話物の前期と後期とでは其の間にはつきりしたひらきがある。一應正德元年⑩「冥途の飛脚」以後を後期として兩者を比較してみ

31

(註3) この點に關してはすでに藤村作博士が指摘されている

ても生活しようとしている。

しているし、又「博多小女郎波枕」の惣七は、毛剃九右衞門の脅迫に近い勸誘 が あ る が、結局は色欲と弱さとの爲に海賊に加わつて が强い。ところが「冥途の飛脚」の忠兵衞は、太兵衞の言葉がきつかけとなつて興奮した結果ではあるが、虚栄の爲に他人の金を消費 て源十郎を殺したのも、主家の爲と云う道德的な理由がついていて、主人公の正當性が主張されている。其の傍ら非常に環境的な壓迫 境が切迫していない。彼はそれ迄お千代をかくまい通している。彼が其の時お千代と心中する氣持になつたのは姑の言葉だけである。 があるが、直接心中の動機になつているのは舅の言葉である。それが「心中宵庚申」になるともつとはつきりする。 其の事は處刑物、姦通物にも云うことが出來る。處刑物から考えると、「五十年忌歌念佛」では罪は無實であり、勘十郎とまちが え 本當の意味の外部的な壓迫は一つもない。此の様に主人公が次第に罪に對して積極的になつている。 それが「女殺油地獄」の興兵衞に至さと、完全に自分の爲に人殺しをしている。彼自身の搔いた種の結果として窮地に入つたの 半兵衞は治兵衞程環

姦通物に入ると、「堀川波鼓」のお種は深酒という惡條件が用意されて居り、「大經師昔曆」のおさんは暗闇の錯誤である が、 、「鑓の

權三重帷子」のおきゐは意識がはつきりしていながら、他人の誤解だけですすんで汚名をきて了う。又、 お種はたつた一度の關係の爲

夫を愛しつつ死んで行くという點では一致しているが、姦通した相手に對する愛情は後の作品に行く程積極的になつてくる ている。然し形をとつてはつきりとあらわれたものではない。それに對しておさゐは誤解される前から權三に意識の有無は別として戀 している。ただ堰を越えなかつただけである。三人とも一寸したはずみから姦通が成立し、嫉妬のからんだ告口によつて罪が決定し、 のあやまちは一時的なものであるといつてよい。おさんは駈落しているうちに意識はしていないが、茂兵衛に對しても愛情を感じ始め に殺される迄逃げるだけ逃げている。又、お種は戀愛があつたかどうか一時的なものより明らかにされて居ない。作品の上からは、 災難に氣が轉倒した爲で、進んでのことではない。そして其の後は矢張以春のことを思いつづけている。おさゐは駈落してからは、夫 に自殺している。彼女が自殺をのばしていたのは夫に一目會いたかつたからである。おさんの場合は駈落ちして居るが、それは不慮の つまり處刑物、姦通物を通して云えることは、極めて初期の作品は、行爲は惡質であるが、それが許される。或は正當化される理

て、主人公の能動性が表面に强く活動して來るのである る。そして環境的な壓迫はあつても、それは寧ろ動機としての役目を持つか、或は主人公自身の播いた種が返つてくる形で残されて來 や主人公の罪に對する積極性が增加してくる。然し罪は輕い。ところが後期に行くに從つて、積極性が增すと共に罪の程度 も 重 く な がついている。それと環境的壓迫とがからんで、主人公は寧ろ悲惨な立場に立つている。それが、次に、そうした壓迫はあつても、

(註4・5・6) この點に關してはのちに作品論に於いて詳論する

域を出ていない。「卯月の紅葉」の今と傳三郎も、自分達の利益の爲に策謀するお家騒動的な純粹の敵役である。ところが「今宮心中」 ものである。「心中二枚繪草紙」の善次郎は、後に後悔しているが、其の變化が誂え向きで不自然である。本質的にはいわゆる敵 役の ら單に遊蕩の無駄づかいの爲に金を詐取した上に、彼に罪をなすりつけている。これは極端な敵役である。 自兵衞は敵役ではあるが自分の利益を考えている以外、 特に二郎兵衞をおとしいれることはしていない。それが「生玉心中」に至る と同時に、

その事は環境的な壓迫の内容にも變化を來たしている。先ず敵役から考察すると「曾根崎心中」の九平次は德兵衞の立場を知りなが

性を帶びている。姦通物でも大體そのことは云えるが、つまり初期の作品の惡人は、專ら主人公をおとしいれる爲の形式的な存在であ ど、この偶然も又實在性を持つてくる。 敵役の中に入れることは出來なくなる。「博多小女郎波枕」の毛剃九右衞門も、 全く自己防衞が目的で惣七の同意も得て居るし、 な惡事はしていない。處刑物の場合「五十年忌歌念佛」の勘十郎は、純粹の敵役であるが「冥途の飛脚」の太兵衞に至ると、いわゆる と、敵役と云うより單なる遊蕩的な無賴漢になつている。更に「心中宵庚申」の姑は、通常以上にしつつこさを持つているが、 する偶發的事件が必ずみられるが、晩年の作、殊に「女殺油地獄」や「心中宵庚申」には殆どそれが見られない。そして後期の作品ほ までは至つていない。又、敵役以外の壓迫についても其の事は云える。初期の世話物から後期に至るまで、絕えず主人公の行動を左右 うなつて來ているというに過ぎず、已然中心は主人公にあつて、敵役が完全な獨立性を持つ處、つまり主人公と對等の人間性を持つ處 敵役が時代物的敵役から、一個の實在性を持つた人間に近づいて來ているのである。尤も、近松の作品に於いては、それは比較的にそ つたものが、後期に行くに従つて、敵役としての役目以外、獨立した存在として作品の中に位置を占める様になつて來る。要するに、 要するに近松の世話物は、題材を當時實際に起つた出來事や先行文學に求めているが、その內容は近松の創作であり、類型的な範疇

の展開の中で、後期に行く程、實在性と主人公の能動性とを増しているということが出來る。